

函南町地域公共交通基本構想

平成 31 年 3 月

函南町 総務課

目次

1. はじめに	1
2. 本町の公共交通の課題	2
3. 目指す将来像とその実現のために公共交通が果たすべき役割	3
(1) 拠点形成の考え方	3
(2) 公共交通網形成の考え方	3
4. 地域公共交通基本構想	4
(1) 既存のニーズと輸送力を活かした基幹交通の再編.....	4
(2) 地域の特性に応じた交通モードによる支線交通の形成.....	4
(3) 持続可能な公共交通の推進	4
(4) 幅広い交流を目指した公共交通網の形成.....	4
(5) 常に進化しつづける公共交通と利便性	4

1. はじめに

我が国では、人口減少・少子高齢化が進行し、自家用車の普及拡大やライフスタイルの多様化等により地域公共交通を取り巻く環境は年々厳しくなっています。

本町においても、人口減少・少子高齢化が進行しているとともに、自家用車による生活が根付いており、伊豆縦貫自動車東駿河湾環状道路の整備により自動車での広域的なアクセス性が向上する等の影響により、公共交通利用者が減少しています。

一方で、公共交通は自家用車を持っていない方や移動に制限がある方にとって重要な移動手段であるとともに、観光交流、地域活力の再生など様々な効果が期待できます。

函南町地域公共交通基本構想では、本町が中長期的な見通しの中で目指すべき方針を定め、今後実施する計画、施策等の大きな方向性を示すものです。

2. 本町の公共交通の課題

公共交通空白地や高齢化への対応など、各拠点・地域に求められるまちづくりを踏まえつつ、公共交通の課題を以下に整理します。

課題1 コンパクトシティ・プラス・ネットワークの考え方に沿った基幹公共交通軸・拠点の検討が必要

- 本町では、「函南町立地適正化計画」を基に、コンパクトシティ・プラス・ネットワークの考え方を推進しており、鉄道駅の利便性の向上、基幹公共交通軸の強化が必要となっています。
- JR 東海道本線、伊豆箱根鉄道駿豆線の2本の鉄道が運行しており、鉄道を利用したの広域な移動が見られ、今後とも鉄道駅を中心とした拠点形成が必要となっています。
- JR 東海道本線函南駅は、中心的な市街地から離れているため、市街地との基幹公共交通軸を維持しつつ、利用者の意向に対応した運行確保が必要となっています。

課題2 持続可能な公共交通に向け、既存公共交通の維持、利便性向上の検討が必要

- 少子高齢化の進行に伴い、通勤、通学利用者は減少する一方、高齢者等、公共交通が必要な交通弱者は増加することが想定されるため、交通弱者等の需要変化への対応が必要となっています。
- 伊豆縦貫自動車道東駿河湾環状道路をはじめとした道路整備等により、自家用車での移動の利便性が向上しています。本町は近隣市町と比べても公共交通利用割合は低い水準となっているため、総合的な利便性の向上が必要となっています。
- 各地域交通事業者においてサービスの確保を図るにあたっては、運転手の確保が必要であり、運転手不足の解消が必要となっています。

課題3 地域の特性や住民のニーズに応じた地域公共交通の導入等の検討が必要

- 本町においては町域の大半が山間部となっており、丹那地区、桑村地区等が交通空白地域となっており、高齢化率も高くなっています。これらの地域における移動手段を確保することによる交通空白地域の解消の検討が必要となっています。
- 本町の文化的な施設、観光交流施設、健康増進施設等は市街地から離れた位置に立地しており、本町の文化交流の促進、地域コミュニティの維持などに向けて、効率的な公共交通での連絡が必要となっています。

3. 目指す将来像とその実現のために公共交通が果たすべき役割

【第六次函南町総合計画(2017年～2026年)】

基本理念 「環境・健康・交流都市函南」

- 基本目標
- 快適に安心して暮らせる環境づくり
 - コンパクトで効率的な都市づくり
 - 誰もが生き活きと暮らせる健康づくり
 - 生涯にわたる学びを支える教育・文化づくり
 - 活力とゆとりを生み出す産業づくり
 - 魅力とにぎわいのある交流づくり

函南町が目指す町の将来像を実現するために公共交通が果たすべき役割は、交通・交流の結節点となる“拠点の形成”と誰もが利用できる、利用したくなる“公共交通網の形成”です。

(1) 拠点形成の考え方

第六次函南町総合計画では拠点形成の考え方を、以下の通り明確に示しています。これを町内外、誰もが利用できる、利用したくなる拠点となるよう、公共交通網を形成し、公共交通の活性化及び再生に向けた施策に取り組みます。

コンパクトな都市構造を活かして	<ul style="list-style-type: none"> ・ 駅周辺等都市的土地利用を図る地域への都市機能集積や新産業誘導を図ります。 ・ 函南駅、駿豆線伊豆仁田駅、道の駅「伊豆ゲートウェイ函南」を、にぎわい生活交流拠点に位置付け、交流づくりの核として多面的な機能を形成します。
良好な自然環境を活かして	<ul style="list-style-type: none"> ・ 豊かな自然環境資源と周辺地域との調和を図ります。 ・ 酪農王国オラッチェや原生の森公園等の地域資源を多自然交流拠点と位置付け、良好な自然環境を保全し、地域内外の交流づくりを図ります。
多様な地域の個性を活かして	<ul style="list-style-type: none"> ・ 町内の文化健康施設を活用し、町民の健康増進や文化の醸成を図ります。 ・ 仏の里美術館、知恵の和館、運動公園等の施設を文化・健康交流拠点に位置付け、町民誰もが快適に暮らせるよう、地域間の連携を図ります。

(2) 公共交通網形成の考え方

公共交通網形成にあたっては、町民が通勤・通学・買い物・通院等の日常生活において更に利用しやすくなるよう、利便性の向上を目指します。なお、本町は町域が広く、住宅地・集落地が分散していることから住民ニーズに応じて、デマンド交通の導入や自主運行バスなどの推進を図ります。

- 各拠点や鉄道駅を結ぶ路線バス等の再編・ダイヤの見直しを検討し、町の骨格軸となる公共交通網を形成します。
- 既存の公共交通の維持、利便性向上を図ります。
- 山間集落地と都市中心拠点・都市にぎわい交流拠点を自主運行バスやデマンド交通などで結び、公共交通の空白地の解消を図ります。

4. 地域公共交通基本構想

地域公共交通基本構想で目指すべき方針を以下の通り定めます。

(1) 既存のニーズと輸送力を活かした基幹交通の再編

町内には路線バスのほか、自主運行バス、病院や集客施設の送迎バス、スクールバスが運行されていますが、利用範囲は限定され、それらの輸送力が十分活用されていない状況にあります。

既存のニーズに応えつつ、その輸送力を効率的・効果的に活用した新たなバス路線の構築を目指します。

(2) 地域の特性に応じた交通モードによる支線交通の形成

本町は町域が広く、住宅地・集落地が分散し、公共交通空白地も広くあり、現況の公共交通網やその利用状況、公共交通に対するニーズは様々です。

このことから各地域の特性や住民のニーズに応じて、デマンド交通の導入や自主運行バスの推進などを含んだ公共交通空白地の解消と公共交通の活性化を目指します。

(3) 持続可能な公共交通の推進

急速に進む少子高齢化、将来の人口減少などによる公共交通利用者の減少やニーズの変貌などにより、これまでの公共交通の形態では事業の継続が困難になっていきます。

利用者層とニーズに合致した、効果的・効率的な公共交通の形態と運営により、持続可能な公共交通を目指します。

(4) 幅広い交流を目指した公共交通網の形成

町内には豊かな自然や文化的な施設、観光交流施設、健康増進施設等が立地し、各種の交流の場があるにもかかわらず市街地から離れた位置に立地しており、誰もが利用できる状態ではありません。

これらの拠点を公共交通で結ぶことで新たな交流をつくり、公共交通の活性化を目指します。

(5) 常に進化しつづける公共交通と利便性

スマートフォンの普及やインターネット通販の拡大などを背景に、人々の情報入手・発信手段、外出のニーズや動向は日々変貌し、あわせて施設の立地や形態も今後変化し続けていくことが想定されます。

技術や環境の目まぐるしい変化に対応し、利用され続ける公共交通を目指します。